

■エッセイ

博物館古往今来

副館長兼学芸部長 佐々木 勝

■1969年—天理大学付属天理参考館

1969年を前後するころ。大学生協の書棚には決まって、マルクスとエンゲルス、レーニン、サルトルなどの思想書が並び、読書家だった学生の本棚には、大江健三郎、高橋和巳、吉本隆明などの、手垢にまみれた本が並べられていたものでした。

当時の学生はこぞって思想を語り合い、解答などあるはずのない設問に、だれもが大真面目に答えようとしていたのです。だからこそ、というべきか。多くの学生は、意図的に観念的人間であるよう振るまい、そうした自分を信じることで、思想や観念にだまされたがっていた、そんな時代でもありました。この時代を振り返るとき、懐かしさの先に、こころのゆとりを失い、息苦しさを覚えてしまうのはきっと私だけではないはずす。

大学紛争の当事者になりそこない、抵抗の「熱気」や、時代の「気分」から隔離されてしまったという疎外感。どんな状況も、押し合いへし合いで過ごしてきた世代にとって、この疎外感には想像以上のパンチ力が隠されていたらしく、40年後の今でもボティブローのように効いています。

反面、ささやかな見返りもありました。あり余るほどの自由時間を手にし、かねてからの憧憬の地、奈良・京都への長い旅が実現したのです。日本文化に光彩を放ち続ける奈良や京都は、漠然と「歴史」を意識した十代半ばの時点から、意中に描いた仮想の聖地でもありました。

未知との遭遇に胸躍らせた毎日。その古都での周遊は、時として人との出会いの場にもなりました。とくに、大学院生だったK氏との出会いは鮮烈で、私と同じ駅舎を宿にし、夜毎、独自の古代史論を開陳するなど、無知な弱輩の道しるべになってくれたのです。このK氏が煽るように勧めてくれたのが天理参考館の見学でした。

天理の町並みはどこかエキゾチックな雰

囲気を漂わせていますが、天理参考館の内部はまさに異国、世界中の「宝物」が占拠し、地球の百花、繚乱するの観がありました。これまで見たことのない教科書に載るような美術品が何でもあったのです。

いずれの展示資料も文句なしの第一級品といえるのですが、とりわけ殷周時代の青銅器、漢唐時代の俑など、古代中国の考古資料は圧巻で、初めて目にしたとき、中国文明の真髄に触れたと感じ、言葉では表しきれない異様な興奮を覚えたものでした。天理参考館の考古資料には、そんな凄みと鮮やかさがあつたのです。

日本文化の原点を探る旅。その意図とは裏腹に、もっとも琴線に触れたのは、巨大なスケールをもつ中国文明の圧倒的な存在感と、その中国に、混然となって絡みあうアジア世界の奥行きの深さでした。

今にして思えば、この天理参考館での感動は、私にとっての一大事件であつたのかもしれません。心身とも盛り上がりつつあるというような、あの不思議な感覚は、もう訪れることがなかつたのですから――。

■1974年—国立民族学博物館

1974年の春。世界中で反戦運動を巻き起こしていたベトナム戦争が、ようやく収束を迎えようとしていました。この戦争をとおし、東南アジア社会の歴史的構図に興味をもった私は、さしたる文献がないなか、『インドシナの旅—カンボジア・ベトナム・ラオス』や『東南アジア紀行』など、梅棹忠夫氏の一連の著作を探りあて、たどり読みを繰り返したものでした。

「しらべようとおもっても本がない」と梅棹氏自身も記すように、東南アジアは、情報すらない日本にとっての関心外にありました。このマイナーな東南アジアに、旺盛な探究心をいただく知識人が実際にはいたのです。これは一種の驚きでした。

同じころ、職場の同僚が梅棹氏の論考集『文明の生態史観』を譲り渡してくれまし

た。書名に写す中核の論文「文明の生態史観」は、世界史理論に関するもっとも重要なモデルのひとつ、と喧伝されていた独創的な史論で、「発展段階論」とは無縁の、文明学の先駆ともいえる斬新な主張に面喰つたものでした。しかも、これまで世界史像の枠外に置かれていた東南アジアやインドが、明快に組み込まれていたのです。

当時主流だった歴史理論は、西欧諸国をモデルにした「発展段階論」が下敷きになっており、中国をはじめとするアジア社会は、「アジアの専制」とか「アジア的停滞」といった、負の対照語をキーにして論じられるのが常でした。アジア社会はヨーロッパ社会に比べ、たえず数歩遅れた段階に位置づけられていたのです。

この年の6月、世界の民族文化を調査研究し、その成果を公開する機関として国立民族学博物館が創設されました。初代館長となつたのが梅棹忠夫氏で、今に続く民博のコンセプト、「世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつ」は、氏の識見がそのまま反映されたものでした。

マイノリティーへの視点。民博ではこの感性が重視されています。海外旅行が一般化した現在でも、世界のエスニック文化に直接触れてきた人は、まだまだ少ないはずですが、民博の展示では、少数民族の生の文化を肌で感じながら、世界一周の旅が完結できるように構成されているのです。

梅棹氏は、館長在職の19年間、対談集などを含め、膨大な数の論考を著しています。私はその一部なりとも読み込んできましたが、論の意味するところ、尋常な想像力では追いつかず、肝心な最後の解釈はいつもナゾとして残ります。

つまるところ、巨人を理解するためにはそれに見合う力量がいるのだと思い知り、ただうなだれるしかありません。今は、偉大な碩学と同じ時間を生きている、このことだけでこころを満たしているのです。

■2007年—島根県立古代出雲歴史博物館

2007年3月。神代のカミガミをまつる出雲の国の中心地、出雲大社の門前に、島根県立古代出雲歴史博物館がオープンしました。展示の構成は、「雲にそびえる千木」とうたわれた巨大神殿出雲大社のなりたちや、出雲国風土記の神話の世界、出雲信仰など、当然のことながら、ひどく神さびてみえるテーマで展開されています。

出雲大社への参詣は、長年持ち続けてきた大願でした。出雲の国は、その想いが簡単にはかなわない、はるか遠方の地にあったのです。しかし、被征服民としての潜在感情が今も生きていう出雲は、蝦夷と蔑まれ、征服の対象であった東北部の住民にとって、距離はあってもごく身近に感じる同輩の地でもありました。

「神々の国」と呼ばれる出雲の国には、おおよしを中心、ヤオヨロヅのカミが集います。私は盛岡市近郊の小村に生まれ育ちましたが、祖父母は、家のそばにあった大きなトチの木、灌漑用のため池、堰、遠くに聳える南昌山など、そのすべてにカミが宿るといい、通りすがりには手をあわせ、こうべを垂れていたものでした。

宗教以前のアニミズムの世界。宗教よりも「自然」が先であることを教えられ、祖父母の言葉は今もここにとどまります。

こうしたカミガミへの儀礼は、不定型な民俗信仰と地続きで、なかには古神道と呼ぶ人もいますが、その由来は有史以前の縄文時代に遡ることは確実で、日本人にとってはきわめて自然な感情の発露です。ここには、道教の重層的な神の、ほんの一端が



島根県立古代出雲歴史博物館（赤沼英男氏提供）

姿を覗かせているだけで、キリスト教やイスラム教の超越的な絶対神はもちろんのこと、仏教の神も存在していません。

欧米の人たちは、アジア社会の本質的な特徴の一つに、超越的な神の不在をあげています。しかし、こうした唯一絶対の神の不在は、必ずしも彼らがいうようなアジア社会の弱点ではないはずで

アジア社会では、宗教が対立軸になるとは限りません。東南アジアを中心に、仏教の神とヒンドゥー教の神が混交したように、アジアの各地では、さまざまなカミや宗教が当たり前の顔をして共存しています。

さまざまなカミが群居し、共存するアジア社会の世界観。この多面的な世界観こそが、むしろ、敗者や弱者も併せて抱え込むアジア的コミュニティの衰退を防ぎ、自分の生活が他人と途切れていないという、人間にとってもっとも根源的な安心感を与えてくれるのではないかと……。底なしの混沌をかき回すアジア社会のエネルギーは、そんな期待をいだかせてくれます。

そして、この多面的なアジア社会への期待感があればこそ、いよいよ考えてしまうのです。今、地球上で渦巻いているグローバル化は、一元的な価値で世界を束ねていこうとする、超越的な絶対神、一なる神の「変相」ではないのか、と。

■2008年—岩手県立博物館

2008年7月。岩手県立博物館を会場にして「瀬戸内寂聴展」が開催されました。仏教の神に帰依した作家瀬戸内寂聴氏は、仏教徒として、戦争に反対する断食祈禱を行うなど、現代社会が抱えるさまざまな課題に率先してコミットしています。

そして、過度な市場主義経済がもたらした不均衡によって、人びとのところが安んじていないことを憂い、法話のなかで「八十六年生きてきて、今の時代がもっとも悪しき時代だと思う」と告げられました。

私にとっても、市場主義経済なるものの

ある一面は、常識的理解を超えています。たとえば、エコノミストは「世界の1割の人間が全世界の富の8割を独占」しても公正で、正当であるといい切ります。

しかし、道理、誠実といった世の中に通じるまともな公正には背を向け、ただただお金もうけのためだけに、通り魔的に他国の経済を食い荒らす、投機ファンドという名の富める国の暴力。はたして、これがほんとうに公正といえるのでしょうか。

グローバル化を動力にし、地球上を駆け回る市場主義の波は、巡り巡って岩手県内の博物館施設の存立にも影響を与えています。これまで100館前後で推移してきた岩手県博物館等連絡協議会の加盟館が、ここ数年間の急速な施設改廃の進行で79館に減少しているのです。この中には、まさに運営の効率性を根拠に、廃館へと追い込まれた施設も当然含まれます。

地域アイデンティティの形成など、博物館がもつ「公」としての使命を考えれば、今日の経済危機を指摘するまでもなく、効率的運営を追求し、その使命を最小のコストで実現していかなければなりません。

ただその一方で、いかに効率性に配慮したとしても、世の博物館には、公益の実現という観点から、市場主義とは一線を画し、将来を見据えて計画的に作っていかなければならない部分が絶対にあるはずで

しかしながら、「民」への移行が真正面から進行し、「公」への信頼も揺らぐなか、この部分の議論は薄められる一方で、時代の風に掻き消されんばかりです。

こうした状況であればこそ、なおさら用心しなければなりません。ひとたび公共性を喪失したならば、そう簡単には引き戻せなくなってしまうのです。なぜなら、公共性の領域は、輿論の態勢を慎重に見定めて、生身の人間が手間隙かけてこしらえる、社会のしくみに関わる問題で、「市場」など入り込む余地はないのですから――。